

ポルフィリオ・ディアスの政策

1876年、ディアスが大統領の地位を獲得するや、文字通りメキシコの支配者となった。誇らしげに自由主義を標榜したディアス政府は、俗人的で進歩的な開放経済政策をとる一方、政治は完全に反自由主義で宗教に関しても寛大であった。政治が安定し治安を回復したことと、政府による鉄道事業への補助金、鉱山と石油開発への助成金、ディアスのリベラルな土地政策などを目当てに、外国の投資家が殺到した。インディアンの共有地を解放して売却することを可能にした1856年のレルド法により、大規模な土地所有者、特に外国の投機家は土地を増やしていった。僅かばかりの土地を取り上げられた小地主や労働者の間では借金に縛られたペオン（借金返済のため債権者の奴隷として働く人）が増える一方、国内外の投資家が繁栄した。金持ちは益々金持ちになり、貧しい人たちは益々貧しくなった。

ディアス政権の経済政策は、近代的、科学的運営により、メキシコは世界有数の国家になるとするシエンティフィコと呼ばれた実証主義者によって進められた。彼等は、ある人種は遺伝と環境により発達が遅れている、という当時広く信じられていた仮説をもとに、文化的に劣っているインディアンは近代メキシコ建設の基盤にはなれないと信じていた。発展という名の下に、彼等はメキシコ・インディアンのヨーロッパ化に乗り出した。彼等の思いつきのため、ヤキ、その他のインディアンは無残にも追い出され、事実上奴隷として大農園に売られた。二十世紀の初め、ヨーロッパやアメリカの実業家はメキシコへの影響力を強め、メキシコは外国人の母、メキシコ人の継母、と呼ばれるようになった。¹¹

当時流行していた知識人の論理、自由主義、実証主義、進化論などの言葉は、少なくとも多くのディアス支持者から現実を遮る煙幕の役割を果たした。1810年、ミゲル・イダルゴ神父の革命により、メキシコは副王時代の絶対主義から抜け出したはずであった。しかし百年後ディアスの平和・秩序・発展にもかかわらず、都市人口は30%にすぎなかった。乳幼児の四人に一人が、百日咳、マラリヤ、黄熱病その他の伝染病で一年以内に死んだ。1900年には5千人に一人の医師しかいなかった。小学校は一万もあったのに、84%の文盲率であった。メキシコは依然として不平等な国であった。ディアス時代が終わる頃になると、土地は次第に一握りのアシエンダ(大農園)の管理下になり、土地不足のため、地方では階級間の緊張が高まった。この副王時代の超悪人でであったアシエンダは1876年には五千七百あったものが、1910年には八千以上になっていた。一部のアシエンダは輸出作物を栽培し、ペオンは家族的に扱われ、給料を受け取り、幸せに暮らしているところもあったが、殆どのアシエンダは全く違っていた。多くの農場主はアシエンダから遠く離れた場所で貴族のように贅沢な生活を楽しみ、農園の生産性は低く、未だ封建的な性格を留めていた。特に南東部は最悪だった。¹²

都市に於ける貧富の差は計り知れなかった。実業家、銀行家、政府要人、ディアスの抱える知識人や技術畑出身の高級官僚からなるシエンティフィコ、裕福な土地所有者、これ

らは皆、大理石、象牙、つづれ織りに囲まれた首都の中心部にある宮殿か、あるいは近隣のローマ、サンタマリア、フアレスなどに建てられたフランス風の大邸宅で暮らしていた。官吏が増え、物質経済が発展したことで中産階級は全国で五十万人に達した。これらのグループは常に生活費の高騰に怯え、政治的には無力であった。都市部の社会的ピラミッドの底辺には百万近くの貧民がうごめいていた。彼等は密集したスラムに住んだ。そこは季節により埃か泥にまみれ、ごみの山に囲まれ、数え切れないほどの安酒ブルケの売人、犬や半分裸の子供たちの間でもよめきながらブルケを飲む酔っ払いなどで満ちていた。社会的な断絶はすさまじかった。¹³

土地分配の問題に加えてメキシコの人口は、健康管理の改善による死亡率、特に乳幼児死亡率の低下により 1877 年の 940 万人から 1910 年には 1520 万人へ増加した。同時にペオンの生活水準は一日 20 セント以下で働いたため、トウモロコシの価格高騰により、以前にも増して貧しくなっていた。これらの要因で、特に中央部や東部の国境に隣接した州のメキシコ人はアメリカ南西部に移住した。¹⁴

ディアスは純粋なリベラルであったが、宗教的には中庸であった。これは彼の弟フェリス・ディアスの死と関係がある。1870 年、フェリスがオアハカの知事になったとき改革法を恐ろしい勢いで適用し、カトリックの尼僧を修道院から追放、教会を閉め、学校でカトリックの教えを禁じた。彼は人々から偶像を取り上げようとして守護神フチタン（村の勇士）の像を縄で縛り、馬で引きずり出し、像の足を切断してから返した。フェリスは翌年ポルフィリオの叛乱に加担してフアレスに破れ、逃れる途中フチタンの者に捕らわれた。フェリスは殺される前に、足の裏を削がれ、生殖器を口に入れられ、ガラスの破片や燃える石炭の上を歩かされた。ポルフィリオはこの苦い経験から学び、権力を握ってからもフチタンへの仕返しはしなかった。¹⁵

ディアスは教会をうまく管理した。彼はレルド法を改定するのではなく、単に適用をしなかった。妻が亡くなったとき最後の祈祷を受けさせるため、ディアスは改革法を認めないと秘密の誓約書を教会に提出した。1881 年、ディアスは神父ギロウと親しくなり、その結果十七歳の少女カルメリータ・ロメロ・ルビオと再婚した。ディアス 51 歳のときである。1887 年、ディアスはギロウを大司教に任命した。ディアス政権の終わりのころには教会はある程度力を回復し財産も増えていた。¹⁶

明治政府はヨーロッパ列強と結んだ不平等条約の修正に躍起になって様々な手段を試みた。その一つがアメリカと対等条約を結ぼうとしたことである。1878 年、協定調印までこぎつけたが、イギリスの猛烈な反対にあって批准には至らなかった。¹⁷ 日本とメキシコの間では 1882 年及び翌年の二回にわたって両国の公使間で交渉が行われてきたが、進展を見ないままに終わっていた。突破口となったのは元駐メキシコ公使であったジョージ・ネイト在日ベルギー大使の仲介であった。1888 年 1 月 14 日、彼が仲介した伊藤博文首相兼外務卿の覚書は次のような骨子からなっていた。交渉の基本は最恵国待遇であること、

ヨーロッパ諸国との条約改定の際に発生する問題を念頭において、契約期限を二年とし、問題がなければ一年毎に自動的に延長すること、最後に両国は全権委員を任命し、ワシントンで折衝、条約の調印、批准の交換までを行うことであった。2月21日メキシコ政府のマリスカル外相はこの条件を承諾する旨を日本に回答し、メキシコ側全権委員にマティアス・ロメロを任命した。¹⁸

その後の交渉は内閣改造によって就任した黒田清隆首相、大隈重信外相によって進められ、全権委員には新任の駐ワシントン公使・陸奥宗光が任命された。大隈は失敗に終わっていた不平等条約一括改定交渉の方針を改め、国別交渉に切り替え、最終的には強行反対派のイギリスを孤立に追い込んで平等条約受け入れを余儀なくさせてしまおうとする作戦に出た。日墨交渉は6月23日から始まった。メキシコ政府は絶対相互主義を受け入れたが、条約によって日本の権利を認める国際的な主導権をメキシコは持たないとして回答を保留し、アメリカの意向を伺った。もうこの時点で日墨関係の陰に必ずアメリカがあるという構図が出来上がっていた。ヨーロッパ諸国のアジア進出に懸念を抱きながらも、日本が結んだ不平等条約を半ば容認していたアメリカにとり、メキシコは現状打開の又とないチャンスを提供した。こうして三国の思感が合致してメキシコ日本修好通商条約は調印される運びとなった。調印は1888年12月3日に行われた。メキシコにおける批准はポルフィリオ・ディアス大統領によって1889年5月25日に、日本は明治天皇によって3月1日、批准書交換はワシントンにおいて6月6日に行われた。¹⁹ ちなみに清国政府とメキシコ政府が交わした修好通商条約は1899年12月14日であったから、日本の方が十年早かったことになる。²⁰

東京のメキシコ大使館の建物は千代田区永田町二丁目の小高い丘の上、この世界屈指の一等地に五千平方メートルの敷地をもっている。建設されたのは1898年で、この一等地に建物を持つ外国公館はほかにない。これは日本にとって国際戦略上重要な意味を持つ、初の相互平等条約を交換した相手国メキシコに対する感謝の気持ちがあらわれたものである。²¹

11. Matt S. Meier and Feliciano Ribera, "Mexican Americans/American Mexicans", Hill and Wang 1995, P104
12. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, A History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P218
13. Ibid. P219
14. Matt S. Meier and Feliciano Ribera, "Mexican Americans/American Mexicans", Hill and Wang 1995, P105
15. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, A History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P226
16. Ibid. P227
17. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、P124
18. Ibid. P17
19. Ibid. P128
20. Dr. Diego L. Chow, "Los Chinos en Hispanoamerica"
21. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990, P111

[目次へ戻る](#)